

近世中頃『(石見) 方言茶話』の地域方言性

——石見・安芸接境地域の言語状況一斑——

彦 坂 佳 宣

1. 『方言茶話』の成立と本稿の目的

近世期の各地方言文献の諸相をとらえる目的で、本稿では東石見の方言資料を考察する。

これに関連する『(石見) 方言茶話・肥後方言茶談・御坊窮賦』(合綴)一岡山ノートルダム清心女子大学・佐藤茂文庫、縦書き・随所に振り仮名付一の語学的な紹介は、米谷(2004)が最初である。このうち前2者が方言法語のもので、本稿は①『石見方言茶話』を考察する。全18丁、序文末に「安永乙未(4年、1775年)、題の下に「^{こうせい}仰誓戯述」、末尾に「安永九年…写、寺本道活 源為重」とある。②『肥後方言茶談』は別筆で全9丁、本文題下に「隈本・村井椿樹戯書」、本文中に「石州ノ御講師ノ…書シタモノヲバ借りテ読ダリヤ…」と、①を承けている。合綴末尾は「安永九年…写之、寺本氏」とあり、①序文の5年後に合綴された模様である。

米谷によれば、仰誓は享保6年(1721)京都高辻生まれ、23歳で伊賀上野明覚寺住持、仰誓の名を受け、44歳で本願寺の石見国布教活動に従い、石見国^{おおち}邑智郡浄泉寺(現・^{おおなん}邑南町市木)に入り、布教活動、74歳で死す。「まとめ」には、①②両地それぞれの方言を使用した法語で、方言の絶対的な知見を付与するもの、資料性は上方語を標準とした観点に注意が必要とある。

仰誓の活動について、小林(1986)によれば、石見国邑南地域を主に彼の石州派の活動の大きさと社会との関わりが述べられ、朝枝(1998)には彼の教化が近世後期の『親聞妙好人伝』の諸本の成立に繋がるとする。思うに、この時代、盛んに法談が行われ、法語類が参照され、①が成り、また時を経ずして②が合綴されたと推測する。

本稿はこの『石見方言茶話』の方言性を検証し、近世中頃の石見・安芸接境地域の言語状況を推測する。この地域は、安芸と石見を結ぶ浜田道の三坂峠から石見の市木、安芸の大朝に、共に約7kmの距離。大朝は最古の『田植草紙』写本の発見地、山内(1962)に類似写本も含め、国語史、歌謡史、安芸石見方言の観点による研究がある(以下、「山内論」)。しかし、室町期成立と思われる「田植歌」(以下、諸本の総称)の写本は近世に入っているものの、伝承歌としてその言語事項の時空の同定は困難とされる。この点、本資料は、書誌が明確で、東石見また安芸接境地域の言語状況を知る手掛かりとなる。序文の主要部には、次の文言がある。

予、浄泉ニ寺務タル事十年、…当国庶人子女ノ言語ヲキクニ、京華ノ言語ト相違シテ、卒ニ通シ難シ。…ソノ中国ト異ナルモノ併集テ凡ソ四百余言ニ及ブ。コノ外、予ガ未タ聞カス知サルトコロノ方言モ亦多カルヘシ。今纔ニ耳ニ触レ記スルトコロノモノ四百余言ヲモテ一時ノ法語茶談トナシ、当国辺邦ノ子女ノキ、ヤスカラシメン事ヲ欲スルノミ。

これによれば、布教地で耳にした方言を活用して法語とし、その内容は、寺に法要の礼に来た「客」

(「^{シノト}日陰ノ爺」—シノトは当地方言—)と旦那寺の「主」(和尚)の話で始まり、客と坊守・姥らの仏道勸奨の会話がある。口頭的方言から丁寧な表現まで幅があり、米谷の言のように、方言性の検証が必要である。本稿では、その方法として、従来、方言資料の記述が内的事象中心であったのに対し、近年進んで来た地域方言の記述や言語地図から史的・地理的観点を援用して検討する。この視点は、従来の主として中央地域の歴史を描く「国語史」に、地方語史をまじえた「日本語史」の可能性に繋がるのではないか。

2. 『石見方言茶話』の表記特徴と検証の観点

当資料には、後の引用例でも分かるように、詳細な振り仮名があり、具体的な語り口が推測できる。こうした資料を、多くは方言史・国語史(中央語史)での重要事項の下に点検し、法語上の言葉遣いと地域方言性までの幅を検証し、当時の方言状況を推測する。

先に、本稿での主要な参照文献を示す。本文中では簡略に下線部で示す。島根県女子師範学校編・担当・石田春昭(1932)『島根県に於ける方言の分布』国書刊行会、廣戸惇(1965)『中国地方五県言語地図』(調査は1955-1961)風間書房、藤原与一(1990)『中国四国近畿九州 方言状態の方言地理学的研究』和泉書院(調査は1933・34年)、『講座方言学』(島根県—神部宏泰、広島県—神鳥武彦)、『日本方言大辞典』、国立国語研究所『方言文法全国地図』はGAJ。

これらは、ほぼ今日のものであるが、時代差の観察や言語地理学的視点で過去の模様を推測することも可能となる。用例の評価にかかわる説明順は、①用例の提示(丁数と行)、②「→」の後に上の参照文献の関連記事その他の抄出、③「⇒」の後に筆者の考察順とした(三者そろわぬ場合あり)。原文の振り仮名は省いた箇所もあるが、論点に関わる所はそのまま、助詞などの片仮名の右寄せも区別し、旧漢字は現行のものに、句読点の加除も彦坂による。

3. 音声・音韻

(1) 音およびその交代…各種見られるが法則的か否か明確でない。随所にある例のみ紹介する。

・釜ニ入レテ^{ラムイ}蒸タリ(ラムイタ)6ウ7、・スンナライタダキマシヨ、14ウ8、・二人^{ゴテ}毎(フタリゴテ)15ウ10、・身ガラガキ^{キタナイ}シヤナフ(キタナイ)10ウ2、・蛙^{ガイル}(ガイル)12ウ6、・持テジャーレ(「おじやれ」のオ脱)16ウ9

(2) ^{ドウソク}ダ・ラ行混乱…・蠟燭16ウ8、・^{ダイ}采昌寺15ウ7(以上、ラ行→ダ行)、(参照文献)→『講座—島根』は、島根県ザ／ダ混同。岡山県西部も⇒島根で一致、また『講座』で九州にも散見される。

(3) シェ・ジェ…・クラアケニ犬ガ^{タチヤウ}吠ジ-エ(ジと小書きのエの間に「-」あり。)17ウ1→『方言大』下36頁図12「セ／ゼ」図…シェ・ジェ有りは、安芸を除く広島県・島根・鳥取、岡山県、兵庫県日本海側から北陸まで、以下略。⇒よく島根と一致。

(4) ン挿入…語頭濁音の特定付属語前にンの挿入、また振り仮名または本文内右傍に小書き(半角

片仮名とした)である。恐らく、濁音前の入り渡り鼻音であろう。

- ・デの前…・息災^{マメン}デヨイ事、2オ5、・ノリテ^{チカラ}ノ力 デユクデハナア。10オ5、・川ノ中^ノンデ、11オ4、・鋸^ノンデ挽レテ、6オ6、・ナリヨツタヤウンデモ、12オ4、・ダの前…・云ダシメサレソウナモノ^ンダニ、11オ10(「云イダシ」のダの前はン無し)、・モトヲラン事ヲ云人^ンダ。9ウ4、・ジャの前…・マコトニ其^ソジャ^{タレ}誰^ソ ジャリ一人モノコル者ハナイ、13ウ6(振り仮名「引」は長音であろう。・ン表記なし…・世ノ中ノハカナキ事ヲ仮名^デ云ヲ 13ウ5 ・恩報スルガ肝要^{ジャ}ゾ。8ウ6 他

末尾の「ン表記なし」例のように、期待される箇所にンのない場合もあり、徹底しないが一詳細にはンの前が長音・撥音などの条件もあろうが、少例で整序的か否か不明一、全体にニテ(アル)由来のものが多い(表1参照、^{おお}智郡は該当)

一方、次のように濁音でも、ガの前や自立語中の濁音前にン挿入は無い。

- ・耳^ガ遠ケエ、5ウ4、・仏^ガ説サレタハ、11オ2、・上^{カミ}ノ間ニ→『講座-広島』110頁「柴田武のキリシタン文献により16世紀末音声上の特色10項目尺度につき、柴田のいう、/g//d/前の母音の鼻音化」はない、それに由来すると考えられる、同音前での/N/挿入事象が認められる。ヤンガテ、カンゴ(籠)など。⇒私見では、参照文献類は非語頭環境と自立語内での場合を言う。しかし当資料では、ニテを内包するデ・ダ・ジャ類の前の挿入例で環境が違う。

山内論では当資料と同じく、「田植歌」写本類に、指定の助詞デ、助動詞ダ(ジャも)の前にンが入り、[ⁿd]の軽い鼻音で、兵庫県但馬中部・島根県石見にある説も引き、これらの祖型「にて」のn鼻音が残ったと推測、その歌謡性も考慮し、安芸石見方言と結びつけて解すべきとする。表1はこの石見邑智郡にまさにンダがある。恐らく中世以降のニテ(アル)からデ・ヂャ・ダへの時期の[ⁿd]由来のものであろう。当資料の時代にもこれが石見山間地域で行われていたことになる。「田植歌」例の時代の特定は難しいが、当資料と一致する点で、近世中頃にもあった可能性が高く、石見・安芸接境地域共通の方言的事象であったと考える。

(5) 連母音の融合事象

- ・アイ→アー…・米ヲ…^{ナア}タ^ケタ(炊)ケニ、15ウ3、・無^{ナアケエ} 故5ウ6(ナイ→ナー)

→『方言大』下3頁-広島・島根県はアイ→アー、広島東部から岡山はアエ・アエアなど。この融合事象は各地多彩。⇒今日もこれら地域に相当な連母音の融合傾向あり。近世中期にも、音価の小異はともかく、同類の融合が接境地域に広く分布したのは事実であったろう。アー形式は、尾崎(1981)によれば、出雲に多く、個別語彙よりも整列的な活用事象に良く保持され、東石見方言に近い出雲南部でも見られるとする。考えるに、もっと古くは東石見の当資料地域にもこの事象が幾らかあったろう。

花	花	花	花	一三、花 だ
ン			だ	
ダ	ジャ	ダ		
		正	飯	
		正	義能	
		丁	江松	
		正	東八	
		正	原大	
		正	多仁	
	丁	正	川藤	
	一	正	石飯	
		正	濃安	
		正	摩通	
一	一	正	智邑	
	正	正	賀那	
	正	正	濃美	
	正	下	足鹿	

表1 『島根分布』花だ

(6) 前項単語と助詞の融合 (文節レベルの問題ながらここに入れておく)

・ハ助詞と前項の融合…マヒラサル^{タア}ハ、3オ4、・タスケズ^{ザア}ハオクマアト、7オ、・〜ト云モ^{ナア}ノハ、5ウ5

→『講座－広島』118頁－「は」の係りが拗音化した…ものは特異なものとして注目される…都市部では少ない模様。⇒GAJ16「ここにあるのは」は広島にナー(ノワ融合)が島根県にもあり、かなり広い中国地方の事象で、石見・安芸接境地域に前から存在した事象と考える。

・ヲ格と前項との融合…僅かに非融合の例もあるが、融合例を代表例のみ示す。・フルナラ^{カソ}ヲサアテ、17オ9(「傘を」→カソー)、・^{チヨ}手ヲ合セテ、6オ10(「手を」→チョー)、・^{ヤク}瘡ヲイタシマシテ、3ウ10(ヤクー)、・^ウ道ヲ用心メサレ・16ウ3(ウは「道」と「ヲ」の間右脇に小字。しかし、ミチウないしミチュー、恐らく後者の可能性)

→『講座－島根』235頁－オ(を)助詞は先行後末尾音と融合、特に先行末尾イ段音の場合「石を」エシュー・エショー両用。『講座－広島』も同類⇒前項母音の広狭による諸形式がある。当該資料も似て、かなり前から石見・安芸接境地域でも行われたものであろう。後述の意志・推量「う」と前母音の融合も同類に違いない。

・不明例…^{クツン}苦痛ヲ受タ身ガ、5ウ8⇒これは「くつつ」のウの音価の問題であろう。ンが撥音か長音かななどの問題は残る。

さて、柳田(2010)に、アクセントの京都式と東京式で、特殊音節の独立性が高い前者では格助詞と前項とが融合しにくく、弱い後者では融合しやすいとする。石見・安芸地方は東京式に近く、大きくはこの言と関連する可能性があるかと思う。

4. いわゆる東西方言の対立的事項

この対立は、明治期の国語調査委員会と言及され、主要方言の近畿と関東の対立的形式を注視した捉え方であるが、これを過去の地域方言にも広げて検証する。石見は西国ながら、この資料には東国的性格や中世国語史に関する事象で—これは遠く東国へも伝播し、東国的指標になった例もあり—、この点を検証する。

(1) 音便…今日五段活用に生じるが、近世での事例として四段活用とする。

(1.1) ハ行四段活用…ウ音便

・銭ヤ餅ヲモロウテイヌルヤウニ、7オ9、・極卒ドモガ…イラアタ和布ヲ、6ウ3

多数のウ音便の中に、後の「イラアタ」の^{アウ}アウ>アーがある。→『島根分布』では88項「書かう」など^{アウ}連母音は、出雲は開音的カカーに合音的カコーが混じり、石見はカコーで、対立が際立つ。『講座－島根』もほぼ同じ。⇒GAJ105図「買った」は、カータは出雲中心で^{カッタ}カッタも混じり、石見・安芸はコータで、稀に^{カッタ}カッタがある。当資料のイラアタは、可能性として、かつて出雲の開音系が石見にもあった、ai環境では石見でも「咲いた」がサータと開音形も稀にあったなどが思いつき、やや多様である。また、上の尾崎(1981)の出雲付近の広域な傾向が思い合わされる。しかし、当資料のハ行四段音便は、全体にウ音便が大部分であり、GAJなども参照すると、これが当時の石見・安芸も地域方言として確実であったろう。

(1.2) サ行四段活用…イ音便盛ん、非音便例も混じる。

・音便形ー・破傘ダケイ、ハネコカイテオカサツテモ大事ナイ。17ウ2、・インデ（孫を）^{スカア}賺
テネサセニヤー、14ウ4（ア+イのアー融合）

前例はイ音便、後例はイ音便が前項母音と融合しアーになっている。非音便の「暖ナツトラ精出シテ参リマシヤウト9オ8（客→和尚）」などもあるが、国語史のサ行イ音便化しにくい語例（橋本1962）ではなく、非音便の理由は分からない。あるいは目上への丁寧な表現のためか、または、この音便の義務的制約が弱いためであろう。この音便化事象は、国語史では中世に生じて近世に衰える。GAJの関連図では、イ音便はほぼ近畿を囲み外郭に分布し、西日本地域での周圈的な位置にあり、古態のものである。上のイ音便例はこれに該当するものに違いない。本資料の諸例は、連母音の融合例もあり、このイ音便が近世期にも方言的に継承されていることが明らかである。

(1.3) マ・バ四段ウ音便…どの例もウ音便

例の限りの語幹末母音別に抄出例を示す。

アー・悔^{クヨウダ}ダテテモ（「悔うだ」）、6ウ5 ・ツラツカウデ（捆）12オ6

オー・御称名ヨコロフデ（喜）、18オ4 ・如来様ヲ…タノフデ、7ウ5

ウー・休息^{ヤスフ}デ、2ウ5

中世国語史では、大塚（1955）によれば、短母音の場合は例外もあるが、語幹末母音がウなら撥音便、他はウ音便の傾向とする。当資料では、語幹母音ウ「休む」を含め全体にウ音便である。一方、山内論では大塚の説く傾向と一致し、「室町時代とほとんど同じ状況」とする。語幹母音ウの例ではないが、『島根分布』の「96 頼んだ」ではウ音便タノダが石見の邑智郡以西に現われ、224 頁解説では同郡をふくむ内陸部とし、以下のように今日撥音便が全体に優勢なのと異なる。⇒今日、GAJ102「飛んだ」では、図示を省くが、撥音便が上方から島根県の石見に掛かる辺り、広島県では同じく西部を除く地域にまで至る。これら以西はウ音便トードである。問題の石見の市木・安芸付近は併用、安芸ではやや撥音便優勢の恰好である。GAJ103 図「飲んだ」の場合も同じ。石見・安芸以西の併用の場合、回答は共通してウ音便が伝統形、撥音便が共通語的である。広島県西部 637913 地点、石見西部 635843・636860 地点、山口県の石見・安芸寄り 636625・637890・638328 の6 地点は、分布傾向から見て撥音便への変化傾向と解される。こう見ると、市木付近では、本資料の近世中頃までは全体にウ音便と思われ、その後、撥音便が萌している。対して、『田植歌』ではウ語幹は撥音便で、石見側より早く全て撥音便となりつつあり、石見と安芸で違いがある。石見と安芸での南北差、大きくは近畿中央からの撥音便化に関わり、近畿から中国の範囲での東西が新古の地理・歴史的関係であることが見えてくる。

(1.4) 形容詞連用形音便…基本的にウ音便

・肴^{オフ}が無^フテ、4ウ6、・コリヤア…大^{フトフ}ゴザリマス。5オ2、・コリヤー、エヅー御世話ニナリマシタ。17オ6、・出合テモ、ヤチモナア自慢云テ、10ウ4

連用形や副詞的用法のウ音便例を示した。最後の副詞的なヤチモナーは、au が開音的アーとなったか、アの語幹保持か、恐らく後者であろう。→『島根分布』124「高く昇った」では、出雲側はタカニ類、石見側はタコーとア段とウ段の違いあり。GAJ138 図「高くて」では、日本海沿岸の鳥取県から出雲にかけタカーテであるが、近畿から中・四国はタコーテとウ音便である。当資料には、「無い」などにア段語幹形もあるが全体にはウ音便で安定し、石見・安芸接境地帯の形式となろう。

(2) 断定辞…本資料には、ダ・ジャ両表記がある（ヂヤ表記はまず無し）。以下、表記別に例を抄出する。ダは通常東国的とされるが、ニテアル＞デアル＞デアに次ぐ変異は各地多様な形式がある。GAJ240「雨だろう」で東石見付近や出雲でダが優勢、西石見、安芸付近にはジャも散見される。

・ダ類

①ジャにダの振り仮名のある例―・コレ御鉢^{ンダ}ジャ、御手窪入レサイセ。3ウ5

②ダの例―直前にンのある例多し

・ンナ人ハ、ナンタ、モトララン事ヲ云人^{ンダ}。 (和尚→客、「模通る―事がすんなり行く」)『日方大』。思うにやや非難口調) 9ウ4、・ソガア思ハサルモ道理^ンダガ、11ウ2 (溺れた兄弟の母→人々)

③ダの前に特にンの無い例…・コノ婆様ハナンタ、ヨカシイ。11オ8、・コンタモ、フノワルイ人間^ダノー。15ウ4

⇒①はジャの振り仮名にダとあり、早い丁数段階で出る。本文はジャでも発音はダとするのであろう。②はダの前に多くンがあり、入り渡り鼻音と思うが、ダの点は動かない。③はダの前にンが無いが、前項末がンのためではないか。本資料ではダが安定している。また、ダは各種の助詞などとも複合し、ダソウナ・ダケエ・ダニなど多様な形式がある。この地域方言はダが主体である。

・ジャ類

・白髪ノ生タ鼻汁ノ垂、腐レタ五鉢^{ジャ}ト思フタニ、8オ7 (和尚→客)、・寺参リヲシテ御恩報スルガ肝要^{ジャ}ゾ。8ウ6 (和尚→客)、・ソツチノ御内儀モ齒ガワルイ「ト+云」(合字) テン^{ジャ}ノー (坊守→客) 15オ8

代表例と対話関係を挙げた。ジャは和尚・坊守から客(信者)へ、上位者からの発言が多い。ダほどは用例がなく他形式との結合例も稀、終止法が主である。この地域にジャが無かったとは言い切れないが、ジャは弱く位相差を伴い説教調の可能性はある。山内論は、『田植歌』はダとジャはそれぞれ数例で僅かに前者が勝り、結論的には混用とし、この地域のダの存在に注意する論調で「『だ』がいつ頃から存したか『田植草紙』がその資料となると言える」(267頁)とする。当資料は遅れて江戸中期ながら、一帯にダはかなり以前からあり、ジャの混用はわずかだったと思う。

当資料からは中世から近世にダがあった点は確実に思うが、デアルからの変化で、恐らく中世末期にヂャ・ダに近い音価で、この地域全体としてはダに傾斜して行ったのではないか。大塚(1959)は抄物例から中世近畿のダを検討し、これもあり得たとする。言語地理学的観点では、表1『島根分布』で石見の邑智郡はダ、ここから西の那賀郡辺りからジャの勢力が増す。『藤原』ではFig.24 (It) is (a flower). では石見側はダ、しかし安芸側は空白で比較できず、石見西端部から山口県にかけてジャ、広島県の東部はダよりジャが多い。図1とした『廣戸』371「高いだろう」(関連部抄出)の「だ」相当も『藤原』と酷似し、安芸の空白だった地域はダである。



図1 『廣戸』「高いだろう」

こう見ると、当資料の近世中期の石見・安芸接境地帯もダが主なのは疑いない。方言として、ここにジャが混じった、またはそれに近い音価のものも混在したか、または仰誓が広域の布教活動で混用ないし位相差のある状

態で使ったのかも知れないが、主たる地域方言はダである。ダ化の時期は不明ながら、本資料、その他によれば、近世中頃には確実に広く分布していた。

・ニテアル・デアル型の問題

ダとジャ（ヂヤ）の前段はニテアル＞デアルに遡るが、当資料でもデアル類が固い表現で現れる

・未熟デアロー。18オ-1、・御坊様も来ンデアラフケニ、9ウ9、

結論として、断定辞はダが主で、ジャは文末に多く位相差のあるもの、固い表現ではデアル例もあるという状況で、地域方言としてはダ優勢であって今日に続くと考える。

(3) 否定辞…ン、表記はヌ多し。

型区分し、用例を示す。基本的にはンが方言的、僅かなヌは何らかの効果が伴うものと思う。

・ン例（振り仮名例含む）…・御風杯ハ召マセヌカ。（客→和尚）2オ7、・コノトウノ（酒の）茶碗ハ…大ゴザリマス。ナンボデモヘラヌ。5オ3（同上）

・ヌ例…・コレカラ何ボ延デモ、ハア二十年トハイキラレヌ。12ウ5（和尚→客）、・領解ノサダマラヌハ、ナンタカイサナ事ゾ。12オ5（同上）

・エーヌ例…・毎日寺参リスル人モ、エマイラヌ者モ、10オ8、・ライメシ（柔らかな）ンデナケリヤー、エツカハサレマセヌ。15ウ1（客→坊守）

・ズハ（ザー）例…・必タスケズ^{ザア}ハオクマアト思召、7オ1（和尚による説明）

ン例はヌに振り仮名を付ける例が多く、初例のような丁重表現もンであり、これが日常方言に違いない。ヌ例は、「エーヌ」を含め、解説口調や準体句の例があり、一定の文体・句構造として、説教文体的なものであろう。定型的条件「ずは」は、融合形ザーとあり、慣用的方言口調であろう。

・過去否定…・子ヲ産テノ間ノ無牝馬デノラレナンダ。（和尚→客）2ウ10（例は僅か）

『島根分布』では101「行かなかった」で、出雲・石見とも～ナカッタもあるが、～ンダッタ・～ンザッタ優勢。GAJ151図「行かなかった」によれば、近畿から岡山そして広島の後援あたりまではナンダ、これ以西は～ザッタ・～ダッタである。当資料のナンダは現在でも、GAJの方言レベルでは中国地域に到達していない。仰誓の親しんだ近畿の形式を時に説教に使用したのであろう。

(4) ト抜け事象あったか（ゆるやかな東西対立事例として、こに入れる）

・～トハ何「ト+^{ナン}云（合字）」御慈悲デ、10ウ1（類例多数）、・白髪ノ生タ鼻汁ノ垂、腐レタ五躰ジャト思フタニ、8オ7

→『島根分布』198項「私も行こうと思ふ」はト抜けが石見に多い。例129「休みだと言うことだ」はこれに反するが236頁解説では無意識の事象で調査法の欠陥とし、ト抜けは石見、また出雲でも多少あろうとする。⇒当資料では初例のような文脈で「チウ」の振り仮名が頻出。GAJ32「田中という人」では、「ト抜け」が大阪府に少し、岡山県と特に広島県に多く、石見側も同じ、これに対して当資料では「ト抜け」無し。上の諸点からは、～チューという説教の言葉遣いとして頻用されるが、地域方言からは遠く、説教調のものだったのではないか。

5. 史的变化を見せる事象

以下には、国語史上の変化に関連する当資料の事項を、地域方言かどうかも含めて点検する。

(1) 二段活用的一段化・ナ変

当資料では、既に一段化が完了し、「食殺レルトキニヤ、6ウ3」「最^{ミイヤスフ}易マヒラレルヤウニ、7オ3」など、二段型が残りやすい助動詞類でも一段型である。二段型は、下例のように、いわゆるラ行下二段敬語辞（「なす+るる、下す+るる」類 - 坂梨 1975）に幾らか現れる程度である。

・極楽へ参ラセテ下サルルニ疑ハナイト、10オ7、・ナサレテ下サレマセ、15オ1

これら敬語表現も説教用であろう、地域方言とは言えそうにない。これが、山内論では、まだ二段型が幾らか残る。この違いは、「田植歌」側のことばの伝承性もあり、近世半ば頃の石見・安芸間の地域の即断はできないが、日常語は共に一段型であったろう。ナ変は、「死ヌル事、13ウ7」など保有されており、今日の中国地方も同様であり、当時の地域方言もこれであった。

(2) 意志・推量辞の体系—特に形式分化の程度—

近世には意志と推量の形式が次第に分化する。中村（1948）は江戸語での意志はウ、推量はダローの分化傾向を述べた。上方も洒落本類では、ウ対ジャローの表現区分が生じている。国語史での顕著な近代語化の例である。当地域はどうか。

(2.1) 意志表現

ウによるものを、活用型別に抄出するが数例にとどめる。

- ・五段型…ゴツトコッチヘヨリヤ、ハナ（話）ソウゾヨ。5ウ3、・上一段型…該当例なし。
- ・下一段型…取^{トリアゲフ}収トシテ、18オ7、・持テ井^ツテアケ^引。3オ8、・ヨロコフデ子（ネ）ヨウゾヨ。18オ4、・観音様ヘアツラヨウ。7オ7など、・カ変…尋^{トメ}テコフ。16ウ7、・サ変…例なし。
- ・その他…如来様ヘウチマカセテ…安堵メサレチヤウズ。13オ1（数例）

ウによる形式は、四段型では「話ソウ」などオ段長音、下一段型「トリアゲフ」はオ段拗長音、第2例の下一段は「～アケ（ゲ）ー」とeu連母音の融合であろう。一方、「寝ヨフ」は短音節のためヨウ分化か、それともオ段拗長音ニョーか不明であるが、GAJ108「寝よう」では石見・安芸付近にオ段拗長音とヨウ分化形が混在する。近世に遡るとヨウ分化の可能性は低く、やはりオ段拗長音であろう。「詵ラヨウ」はeuの融合の帰結で、ヨウの分化ではない。カ変はコー、サ変例は見当たらないが、GAJ111「しょう」では広くオ段拗長音ショーで、近世中頃も同じと思う。「その他」のウズ例は、仏法への帰依を慫慂する和尚の敬語的固定表現に現れ、潜在する古態のウズで説教の効果をねらったもの、やはりオ段拗長音形である。上一段例は、後述のように、ヨウ分化前の開合の区別を保つ、合音側のウ段拗長音と推定する。

(2.2) 推量表現

これもウが主で、当資料は、稀に「断定辞デアル+ウ」によるデアローがある。ただ、熟合形ダロー・ジャローに進んでいる例はない。また、「らむ」出自のローも無い。例をダ・ジャの前段ニテアル類や過去推量例などを含めて示す。

・ウ（自動詞多数）…死ナフトモ、8オ3、・ヨカラフ。5オ5、・デアロー…未熟デアロー。

18オ-1、・御坊様も来ンデアラフケニ、9ウ9、・過去推量……～ニ成^{ナツ}ッロー。5オ8

今日の模様は、早く『島根分布』121「浅からう」でも、直接するウによる～カラー出雲、～カラー石見が圧倒的で、これに断定辞後接の「アサイ+ダラー／ダロー」も混じるが劣勢である。近時のGAJ112「書くだらう」などでは、ウ（カコー）が岡山県・島根県石見から山口県にかけかなり残存している。なお、「らむ」出自のローも山口県側に多い。過去推量のGAJ115「こどもであつたらう」は、断定辞が後接するのは出雲ダッタダラーがあるが、石見のダッタダローは1例のみでウが直接付くダッタローが圧倒的である。近世中期の本資料の推量形は、動詞・形容詞ともウが主体で、今日でも同じ、当然ながら当時も意志・推量表現の分化は進んでいない。

(2.3) 意志・推量形式の特色

こうして当資料では、意志・推量とも主としてウにより、四段活用・カ変を除き、拗長音形が主で、一段型類にヨウの分化は微弱である。山内論の『田植草紙』にある「らむ」出自のローもまずない。『島根分布』の過去推量ではツラがあるが、これはツロも加えれば各地にある。その中で、用例の無かった上一段意志・推量形の形式が問題である。

これには明治期『口語法調査報告書・上』第三条・島根県の各活用型の活用例に「石見国」の「未来」が上一段類5語すべて「起きう（okyū）」などであり、「此ハ本郡西部ヨリ東漸ノ模様ナリ」とする。この「東漸」は傍証がほしいが、ウ段拗長音であったことは疑いない。これは、表2『島根分布』「起きよう」でも出雲オ段拗長音オキョー、石見ウ段拗長音オキューで、特に邑智郡以西に目立ち、『藤原』Fig.42 Let's get up. (起きよう) でも同じである。図2にこれら以後の「起きよう」の時代差を1955-1961年調査の『廣戸』374と1970年代後半のGAJ106「起きよう」の比較

オ	オ	オ	起き
キ	キ	キ	よう
ー	ー	ー	
	正		岐路
	正		義能
	一		江松
一	正		東八
	正		原大
	正	一	多仁
	正	正	川藤
	正	下	石飯
	正	下	濃安
	正	一	摩通
正	正	正	智邑
正	正	正	賀那
下	正	正	濃美
正	下	下	足鹿

表2 『島根分布』起きよう

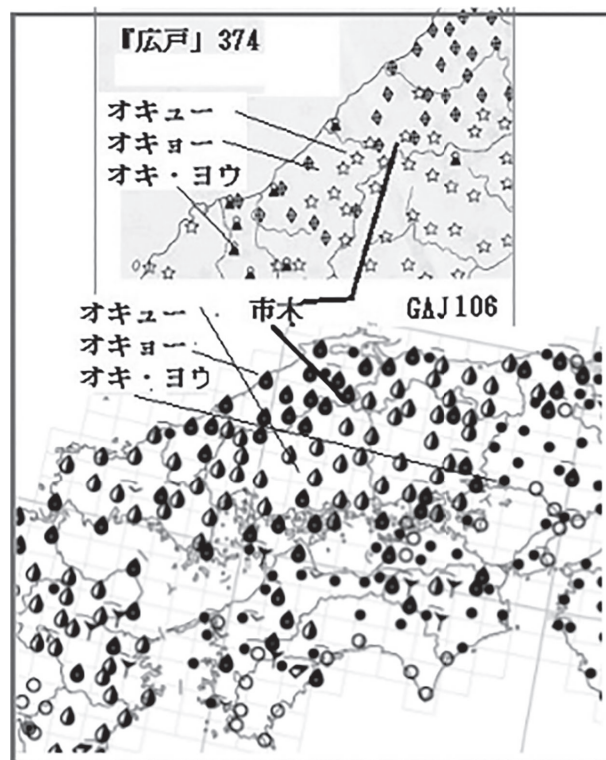


図2 『廣戸』とGAJ106の比較

で示した。『廣戸』ではオキューが石見内陸部に広いが、出雲ないし沿岸部のオキョーに囲まれる様子がある。GAJの時期には石見からオキューは減退し、安芸はオキューを維持しており、石見と安芸の境界付近でオキューの消長に違いが生じている。

近世中頃では市木付近の石見と峠を隔てた安芸ともに、上一段活用の意志・推量形はウ段拗長音であったことは確実であろう。

この変化は、言語地理学的解釈として、図2のGAJでは、内陸のウ段拗長音オキューを囲んで、外郭にオ段拗長音オキョーがある。これは国語史での上一段の変化、①割る「起き+ウ」>②ウ段拗長音「起きュー」>③優勢な下一段型に合流し「起きョー」>④ヨウ分出「起き+ヨウ」のうち、GAJの中国地方で①は消滅、②が内陸部、③がこれを囲む外郭で②から変化、④ヨウ分出にはまだ届かない段階である。この時代差は、内陸の②がその外郭で③へ変化したことで、市木付近の石見はその位置、安芸側はなお②段階で、地域差がある。

(2.4) 今日の意志・推量形式との比較

意志・推量形式は、中央語では近世中頃に分化を起こしていた(中村1948)。中国地方の地域方言ではどうか。当資料の意志・推量はウにより、分化が弱い。これに対し、近世末頃の様子しか分からないが、西日本周辺地域では、土佐(諸星1997)や九州(彦坂2001)、越後沿岸(彦坂2017)でロー相当があり、「意志/推量」が「ウ/「らむ」出自のロー」、これが飛んでナヤシ(長野・山梨・静岡)地方ではおよそ「ウ・ウズ/ラ(「らむ」出自のロー相当)・ズラ」の区分があり(彦坂2009)、分化が進んでいる。近畿の西・東の外郭地域では、「らむ」出自のローないしラが関与し、国語史の時間軸では中央語推量形の上方ジャアロー、東国ダローより早い定着のはずである。こうして近畿を囲む西日本周辺地域では、ローが関与し、中央語の上方・江戸より早く意志と推量の分化が成立した筈である。現在この地域は、図示しないが、ジャロー・ダローなどの推量専用形化が進んでいるが、近世中頃は、まだローが大きな役割をしていた。その中で、当資料での石見邑智付近はローが乏しく、分化は遅い。これはGAJ112「書くだらう」などで、上に触れた古態のウが岡山・石見・山口にかなり残り、山口にはローもあり、近世の「田植歌」では、船木(2021)は、邑南の田植唄2種にローは2例と僅か、山内論では主に安芸の同唄で10例程度あり、地域差のある模様。東石見はローが乏しくウに依存する傾向が強い。ウとローとで東西差があった。

6. 助詞類から一準体助詞、順接一理由表現、逆接など

(1) 準体法・準体助詞

準体法は、かなりの例がある。例は省く。準体助詞はノが現れる。

・足の達者ナ者ガ乗タノモ、跛躰ガ乗タノモ、舟ノ著ハ同事、10オ4、・カン(爛)ノ能ノヲ…
一ツノミヤレ。5オ9、・後生心モアルノニ、聴聞モセ、リクサーテ、12オ2

最後の例は逆接の「のに」であるが、当資料にはまだ二単独形が多い。準体助詞の形式化が遅く、逆接のニと結合して接続助詞化するのが遅いためであろう。山内論にも準体助詞ノがあり、近世中頃にこの準体助詞があったことは確実である。そして、近世中頃の当資料に1例ノニがあるのは、方言よりも幾分か早い例で、論理をつくす説教表現のためではないか。

(2) 接続助詞・接続詞

当資料は、日常語的和語それも方言調のものによる面が強いが、委細を尽して訴える説教口調も混じる。接続助詞や接続詞は種類が多い。近世中期の時代を反映して、バ単独のものよりも、ナラバ・タラバの複合形またそのバ略形もある。接続詞の類も多い。接続詞は一般に他の形式からの転用で、特に接続助詞との複合が多い。資料に現れる例を口語／文語に分け、およその用例数も添えた。

口語的…スンナラ 8、ソノケー 2、シタガ 2、ソレト 1、ソレデモ 1

文語的…サマレ 3、サレド 11

(3) 順接形式

多種あるが、理由のケニ類が多く、また国語史での小林(1977)に見る、中世から近世にかけてのホドニ・ヨツテもあり、しかし近世以降に盛んとなるサカイ類は無い。比較的新しい「ナリ＋バ」組成のものもあり、対して活用語に直接するバ・融合例～リャー類は低頻度で、偶然ないし恒常条件に傾く。ここでは、特に理由表現を見る。

原因・理由表現

順接でも特に特有形式の多い原因・理由表現は、後の GAJ33「雨が降っているから行くのはやめろ」のケニ・ケン・ケー、カラ類がこの地域方言の問題となりそうである。

当資料の例は次のようであり、ケニの中にケーもある。カラ例も示した。

・ケニ・ケー類…①(孫は)私と寝ニヤーキ、ヲリマセヌケニ、…ダマシニ出テ参リマシタヨツテ、カヘラザー腹立テハブテマスケニ、インデ賺テネサセニヤー大概ナ騒動ジヤァゴザリマスマイ。ソノケイ、イチモクカヘラザーナリマスマイ。(客→和尚) 14ウ3、②牡馬ヨリヨホカナイ故、2ウ9、・諸仏モ菩薩モ…^{マモツテゴツ}護^{ケエ}サルケニイツ何ドキンデモ…、7ウ9(「故」の箇所はケニの振り仮名の更に右にエがある)

ケニに混じりケーがあり、①の後半のソノケイは接続詞化しており、この形式がある点でケー化も直近の変化ではなさそうである。②にはケニの振り仮名にケー相当がある。この時期、ケニが次第にケー化する様子である。山内論では、ケニを「方言の『けん』『けー』などの祖形である」とする点で、安芸山間部も大勢はケニで、石見の当資料と共通していたと思う。『島根分布』-148項「から」は、出雲ケニ・ケン、石見ケーであり、石見市木付近ではかつてのケニが消え、ケーに変化し、安芸側と同化している。出雲などはなおケニからケン化の段階である。上一段未来形は、内陸に古いウ段拗長音、外郭に新たなオ段拗長音の古／新の分布であったが、この理由表現のケニ・ケーは新古関係が逆の地理的位置にある。個別の条件によるのであろう。

・カラ…・如来聖人ノ御恩ハ捨置レタ事^ンデハナアカラ、…寺参リヲシテ御恩報スルガ肝要ジヤゾ。8ウ4(旦那寺和尚→客)

数例見えるが、複数の使用者がおり、方言的な連母音形式(ナイ→ナア)とも結合して、地域方言的な感じがある。幾分かは使用されたのではないか。これとケニ類との先後は問題となるが今は分らない。

(4) 逆接

当資料では、ガが最多で軽い逆接的な用法が多い。強い逆接ニもあり、ノニは1例のみである。他にトモ・ドモ類が続く。例を抄出する。

- ・ガ…日毎瘡瘡而死ヲイタシマスガ手前ノハ大方仕立マシテ、喜マス。4オ3
- ・ニ…・今マデハ…腐^{クサレタ}五躰ジヤト思フタニ、目ヲ開テ見タレバ夢ノサメルガヤウニ…
光明^{ヒカルガヤウナ} 仏ニナリ、8オ8
- ・ノニ…・コンタのヤウニ…後生心モアルノニ、…ミーヤスイ御ス、メヲ合点メサレズ、…
12オ2 (和尚→客、説得調)

図3のGAJ38「寒いけれども…」(関連部抄出)には、中国西部にガが多く、それを取り巻いてケド、広くケードがあり、ケレドモ>ケード>ケドの変化を見せ、四国はケンドが広い。彦坂(2010)では、ガの東西地域がケードに囲まれているのは、理由ケーがこの時期に先行した逆接ケードと同音衝突を起こすためガが保有されたとする。当資料の市木は出雲のドモ(寒いドモ/行くドモなど)から西のケード地域に接するところにある。『島根分布』の「131 行くけれども」では、出雲は～ダドモが多く、隣接する石見3郡にも及ぶが、「行キヤスルガ」のガが石見地方には極めて多い。今日の図3と同じである。近世中頃、石見・安芸山間地域は、中国地方にケレドモ類は伝播していたが、主にガの状態だったのではないか。

当資料ではガの他に、ニが強い逆接を担当し複数例ある、その中に1例ノニが混じる。参考になるGAJ40「植えたのに枯れてしまった」では、図示しないが、およそ広島側がノニ、出雲・石見側はニにノニ混在、長門はソニ・ソエである。当資料の時は、GAJの石見の一部併用のノニがまだ稀で、ニ優勢の状態であったと考えられる。準体助詞にノがあるものの、まだ接続助詞に波及しない状況であった。安芸側は石見より早くノニが増大したであろう。

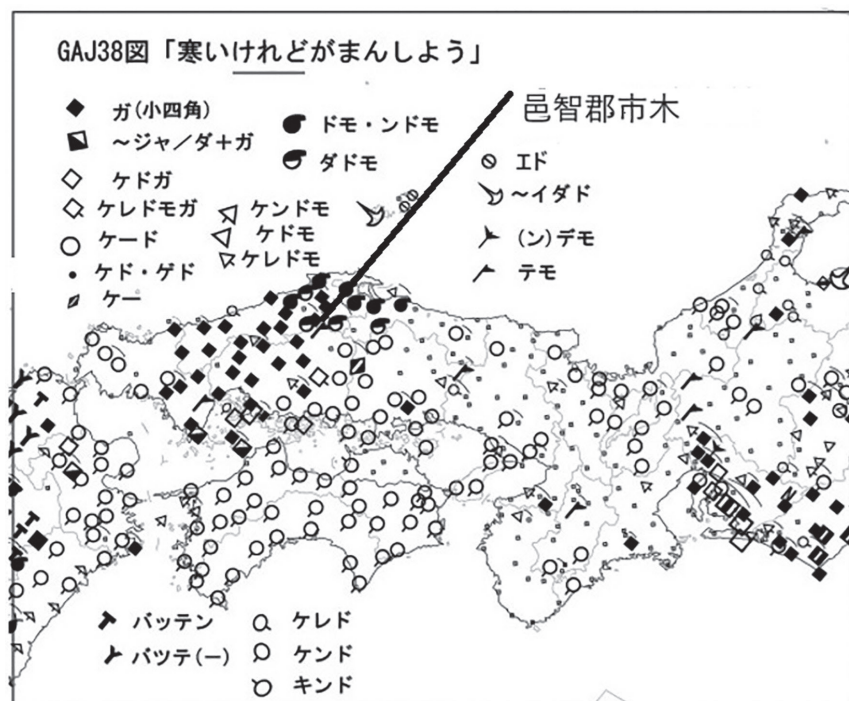


図3 GAJ38 逆接図

7. 語彙

(1) 方言的語彙の例

『方言大』で邑南郡付近を含むやや広い近隣地域の方言語彙を幾つか挙げ、当資料が地域方言と密接なことを示す。用例の後に『方言大』の説明を抄出した。語史の絶対年代的な面に寄与しよう。

・小豆^{アクネ}ノ煮タガアル。15ウ9「あくねー麦粟など入れて炊いた飯」島根邑智郡、・ナンジヤリ、イタシ井事ハナア。12ウ9「いたしいー病氣」出雲、・ソノケイ、イチモクカヘラザーナリマスマイ。14ウ6「いちもくー一目散」島根、・エキ^{イニイ}ヘ新ニ家を造テ、17オ4…「えきー谷間辺鄙な処」島根広島山口、・ナンチウカイサナ死ニヤウヲシタ事カト、11ウ7「かいさーつまらない」島根県、・ソノケー、二人毎ヤライメシンテナケリヤー、15オ10（二人とも柔らかな飯でなくては）「そのけーそれだから」島根県美濃郡のみ、・マタナゴライタラ^{ヒジヤア}参ラサレー。16ウ3「なごらくー降雪後晴天になる」島根県、邑智郡、・参タ分ニヤ所詮ハナア。9ウ7「ひじやあー訳ない、甲斐ない」島根

(2) 語誌記述への寄与ー「驚く」「人称代名詞」類などの語誌研究に寄与する面に触れる。

・たまげる…・二人トモ…カア死^{タマゲ}ンダトキニカノ母ガ喪^{タマゲ}膳テ、11オ5

タマゲルは『日本言語地図』で、上方ービックリスル、その外ーオビエル類、さらに外ータマゲル類の並びで、この逆順の語史とされるが、地図解釈は語彙相互の前後の相対年代は推測できるが、実年代の遅速が分からない。当資料は、その成立からして1770の実年代が分る。また『物類称呼』（1770）には「東国にてタマガル」とあり周知のことながら、近世中頃にはこの周囲論的配置があったと分かる。「驚く」の語史研究に資する例である。とは言え、古くからの「魂がる」の変容形が後にここに出現したため、その変化と地域性を生じたより詳細な研究が求められる。

・あなた（二人称代名詞）

・コッチヘヨリヤ、ハナソウゾヨ。（客）ハイ、コレハアナタノ御側ヘ用捨ニゴザリマスガ、5ウ3（和尚・客の会話）、・アンタノヤウナ、フヤウナ人ニ…寺参リヲシヤーレト云ンデハナイ。9ウ5（和尚→客）

『日本国語大辞典（第2版）』の「対称」例は、宝暦（1751-）頃からとし、歌舞伎『傾城天の羽衣』並木正三（1753）を初例とする。本資料で、「アナタ」の市木への到来はわずか20年後で、上方の仰誓のことばが出たとしても早すぎる。一方、GAJ336図「あなたの傘」（0場面ー親しい友達に向かって）によれば、本州の大部分がオマエ類なのに、広島県のほぼ全域に確実にアンタが現れ、言語地理学にかなり早い分布となる。この間の経緯の解明が求められる。全国的な対称代名詞の地理学的解釈に関わる事例であり、安芸・石見接境地域の地理学的研究に資する面がある。

以上はわずかな例であり、個別の事象だけでは語誌記述は難しいが、丹念に探せばその経緯を含む史的記述が出来るよう。

8. まとめ

改めて①地域方言性、②歴史・地理的観点から整理すると、次のようになる。①地域方言性では、法語的な面が強く、地域方言外的事象として、ナンダ・非ト抜け、断定ジャ、敬語類、推量ウズ・デアローなど、②石見・安芸接境部の共通面は、各種の音・文節の融合事象、断定ダ、ン入り渡り鼻音、多くの音便形、逆接助詞ガ、差異面は、石見側で言うと、音便のうちマ・バ行四段ウ音便（安芸などではン音便化）、未来形ウ段拗長音保持、意志／推量の分化度は小さく、推量ロー稀、理由のケンからケーへの変化—これらは、狭くは接境地域の石見・安芸の南北差、大きくは中央部近畿からの影響度など各種の違いによる。以上により、史的・地理的に明確でなかった、近世中頃の石見・安芸接境地域の言語状況の一斑が明らかになったものと思う。

参考文献

- 朝枝善照（1998）「仰誓著『親聞妙好人伝』諸本の考察」『印度学仏教学研究』46
 大塚光信（1955）「バ四・マ四の音便形」『国語国文』24-03
 大塚光信（1959）「ダとある種の抄物」『国文学攷』21
 尾崎秩子（1981）「出雲西部における開音類の分布」『言語学演習』（東京大学）、のち『日本列島方言叢書』19所収
 小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5
 小林俊二（1986）「近世石見の『妙好人』とその背景」『近世国家の支配構造』雄山閣出版
 坂梨隆三（1975）「ラ行下二段活用 of 四段化」『国語と国文学』52-1
 中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房
 橋本四郎（1962）「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』31-04
 彦坂佳宣（2001）「九州における活用型統合の模様とその経緯」『日本語科学』9
 彦坂佳宣（2009）「東海・東山地方における意志・推量表現の交渉と分化」『論究日本文学』91、立命館大学日本文学科
 彦坂佳宣（2010）「『寒いけれども～』（『方言文法全国地図』）の解釈」『日本語の研究』6-4
 彦坂佳宣（2017）「東北日本海側における一段活用類のラ行五段化傾向」『立命館文学』654
 船木礼子（2021）「田植歌に見る石見方言のモダリティ形式」『神女国文学』32
 諸星美智直（1997）「武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語について」『国語学』191、のち（2004）『近世武家言葉の研究』清文堂出版
 柳田征司（2010）『日本語の歴史1』第9章、武蔵野書院、
 山内洋一郎（1962）「田植草紙」のことば『田唄研究』03、のち（1989）『中世語論考』清文堂出版
 米谷隆史（2004）「『(石見) 方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐる」『近代語研究会・第219回、発表資料』

謝辞 この資料の利用を許された米谷隆史氏に感謝する。

（本学名誉教授）